

結成！「長谷地ファイブ」

ながやち



板垣敏明さん、川田恒雄さん、板垣ふじ子さん

板垣誠さん(代表)、矢萩幹雄さん

農業を次代に引き継ぐための基盤整備

山形県村山市名取地区では、地域の農業をみんなで考えた。転作するにも田は小さいし道路も狭い、後継者が育たず耕作放棄地になるのは時間の問題だ。これを解決するために地域が選んだ道が、基盤整備事業「西郷名取地区」である。田の面積を大きくし機械化も進んで作業効率が良くなると、手間のかかる作物の栽培も可能となった。

これを機に西郷名取の長谷地地区で新たな作物の栽培に取り組むため、地元の土を知る熟練農家が、「皆で里芋やりませんかー」と集結したのが『長谷地ファイブ』の5人である。当時は全くの手探りの状態であったが、地域の土壌に適していた里芋を選び、試行錯誤を重ね里芋の栽培が続いている。今でこそ活動は盛んだが、軌道に乗るまでがとて大変だったとのこと。「昔から見知った面々でグループが分裂せずにうまくやれているからこそ、現在まで活動が続いている」と、代表 板垣さんの妻・ふじ子さんは言う。里芋は事業を機にはじめた作物の一つだが、今やグループの自慢の逸品である。

後継者の育成については地区全体を意識し、観光という新しい分野へ足を踏み入れている。「売り方を考えなければならぬ。」試行錯誤を繰り返してきたチームの言葉にはとても深みがあった。「退職後に家業を継ぐ人も多い。今度一緒に酒でも呑みながら、農業について話そうかな」インタビュ어도5人揃って対応してくださった仲の良いメンバー。なんとも頼もしいベテランの先輩方である。

観光とコラボした新たな試み

『里芋収穫体験ツアー』

今年で4年目となる里芋収穫体験には、宮城圏内からの参加者を中心に約500名が訪れている。試行錯誤で作ってきた里芋は、包丁に吸い付くような粘りが自慢で、いまやリピーターも増えつつあるとのこと。

雨天時には育苗ハウスを使って収穫を可能にしている。しかしながらツアーが行われる期間中（9月中旬～下旬）、持ち帰りの重量や芋の味は変わらないが、時期が早いと芋のサイズが小さめになってしまふという悩みもあるようだ。いかに喜んでもらうかを考える5人のあたたかい人柄と、より良い活動を目指すプロ意識が垣間見られた。

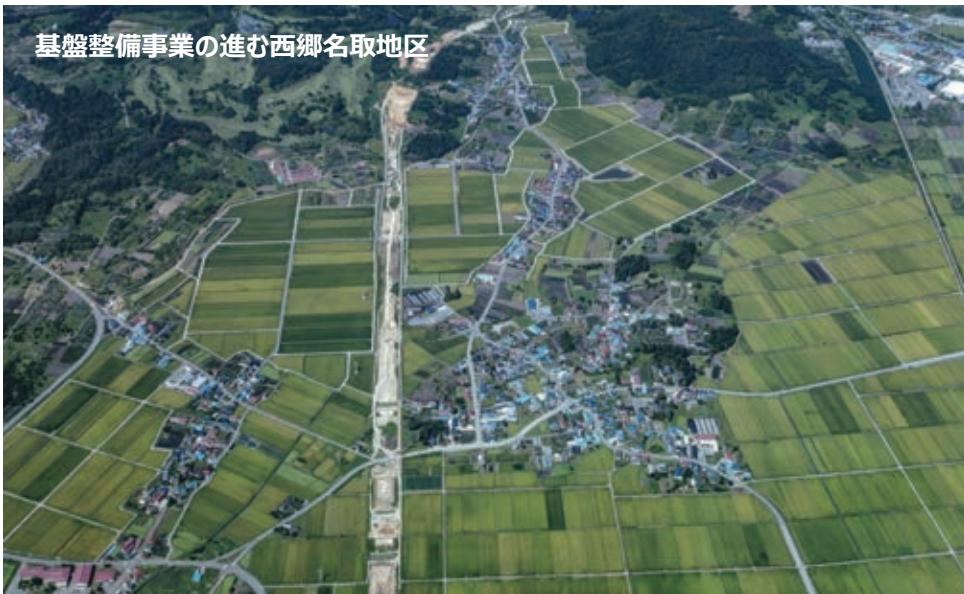
農業を観光へと発展させた取組みに対して現在の心境を尋ねると「楽しいー」と板垣敏明さんの第一声。苦労の中にも喜びがあるようで、活動を成功させるための秘訣ともいえそうだ。

ツアーでの収穫の様子



お問い合わせ先 一般社団法人 村山市観光物産協会
山形県村山市新町 1-10-1(村山駅東口) TEL 0237-53-1351

基盤整備事業の進む西郷名取地区



この事業では、完成した水田で畑作物ができるように、水田の地下に排水管を入れ地下水位を下げる工事を行っている。雨の少ない時期には排水口を閉じて取水した水を溜め、地下から作物へ水かけを行う「地下かんがい」も行うことができる。

